

平成 29 年 5 月 20 日

北関東フォーラム

於：シムックス

**中斎塾 北関東フォーラム
平成 29 年度第 4 回**

絶対の静寂（しじま）

遅れて入って来られた方がおられます。遅刻をせざるを得ない状況は沢山ありますから、その時に胸を張って堂々と入って来る方と、氣配りをしながら入って来る方とでは、だいぶ印象が違います。先ほど司会の塚越参事が、「どう話すかより、どう聞かれているかを気にすると良い」という話をされました。同様に、どう見られているかを意識しておく、多少自分の行動に影響が出るから良いことだろうと思います。

私も話をする時には、話がきちんと伝わっているかの確認を致します。大きな会場であれば、後ろの人に聞こえているか確認をしますし、これくらいの小さな会場であれば、皆さんの目を見ていると何となく話していることが伝わっているなという手応えを感じて、その先を掘り下げて話をしたくなります。普通は知識を紹介しながら横へ横へ話を広げていきますが、この話はもう少し掘り下げた方がよいなという時は、皆さんの眼の輝きを見ながら進めていくことが多いです。

学ぶ時に先生の言われることが自然と身体の中に沁み込んでくる場合は、だいたい自分が欲している時です。相手が話をしたい内容と自分が聞きたい内容が一致した時は、どんどん吸収できますから、とても素晴らしい状況だと思います。その最高の状態が写瓶です。写瓶とは、甕の中の水を全部別の甕に移すように、自分自身の知識・見識・胆識、自分の覚えている全てを一人の弟子に注ぎ込むことです。師匠が全身全霊で注ぎ込み、弟子が全身全霊で吸収する。その場合、先生の言っていることを丸ごとすべて吸収するには、真っ新たな状態になっていなければ入って来ません。先生の話、<これは良い><これはだめだ>と考えながら聞いていたのでは、全てを受け取ることは出来ません。

分かりやすい話で申し上げると、中村天風先生の書かれた本にある「絶対の静寂」です。中村天風先生は結核を患って、このままでは死んでしまう状態になり、自分の弱った心身を治してくれる先生を世界各国探し歩いたけれども見つからない。そして最後に、日本に帰る船の中でカリアップという先生に巡りあったのです。カリアップ師に付いて修行を続ける中、「お前はまだ本気で病を治す気がない。お前は今の近代文明のものの考え方で私の言うことを取捨選択しながら聞いている。こういう状況ではとても本物には結びつかな

い」と、自分を空っぽにしなさいと諭されます。キャリアアップ師の教え通りに、轟々と音をたてる滝壺の上の岩で坐禅をして、頭を空っぽにする訓練をするうちに、ふっと心が無くなった。轟音の中で何も聞こえない「絶対の静寂（しじま）」を味わうことができたのです。つまり、空っぽになってはじめて入って来るのです。

人と会う時も同じです。初めての人に会うと、だいたい名刺交換をして相手を押し量りますね。以前、経済同友会で有名なジャーナリストの方に講演して戴いた時のことです。終了後、聴講者の方々と名刺交換をしておりましたが、その方は差し出された名刺をさっと見て、相手によって頭の下げ方を違えていました。肩書きによって態度を変えることが身に付いている人は、真っ新に相手の言うことを聞く人ではありません。心と心が触れ合うような感じで相手の話を聞ける人は、誰に対しても態度が変わらないと思います。

今申し上げることは「耳順」の世界です。論語に「吾十有五にして学に志す・・・六十にして耳従う」とあります。自分が真っ新になっていると、相手の言うことがスッと入って来る。その人の言う事を聞いて、お付き合いをしてもよい人か、あまり会いたくない人かという具合に自然と選り分けられる。これが耳順の段階です。洪澤栄一さんは80代になって初めて耳順の境地が分かったような気がする、と残しています。

孔子の語った「七十にして心の欲する所に従へども、矩を踰えず」までの、その時その時の自分自身をずっと振り返ってみるとよいと思います。一つの目安になるのが、耳順の境地がいつ頃出てくるかです。肩書きで何となく頭の下げ方を変えることのないように、その方の話の中味、客観的事実、発するオーラ、そういうもので自然と受け答えが出来るようになれば素晴らしいと思います。

相手の言うことが素直に聞けるようになるためには、自分が常に真っ新になることです。人の言うことを素直に聞くためにはどうしたら良いかを考えて毎日動いていると、ものの見方が変わってきます。家庭でも、奥さんの言うことを良いとか悪いとか分別せずに、素直に聞くようになると夫婦円満になります。分別（ぶんべつ）と分別（ふんべつ）は違います。分別（ふんべつ）をもって分別（ぶんべつ）をしているのならよろしいのですが、はなから聞く耳を持っていないのはいけません。だいいち、素直に聞いているかどうかは態度にも出るものです。

知識・見識・胆識 — 自分の引き出しを広げよう —

川村代表幹事の挨拶、森友学園の話の中で「村度（そんたく）」という言葉が出ました。森友学園についてはマスコミが何も言わなくなりました。周りの人たちが御膳立てをして何とか安倍さんに向かう話を減らし、＜森友学園が悪い＞という流れを作って、やっと取

まったと思ったら、また別の学園の話が出てきました。安倍さんは何時までもつか・・・という状況だと思いますが、かなり運が味方をしていますね。

「付度」とは基本的に良い言葉だと思います。相手の言葉を押し量る。そこで止めておけばよいものを、行動するからいけません。付度をして、少し相手のために良いと思うことを心がけていれば、自然とにじみ出てくる内容のものです。付度して行動までいくと、やり過ぎになります。安倍さんは自分でも「付度して下さい」と使い出しましたから、良くないと思います。

今朝の日経新聞から気になった記事を申します。ヤマトが20%値上げをする。郵便局や佐川急便より20%近く高いという記事です。新聞の読み方は、一つの記事を見たら、自分の引き出しがどれだけあるかが自然と見えてくると、かなり良いレベルだと思います。

この記事から皆さんは何を連想しますか？

(会員回答) ドライバーの人手不足

(会員回答) アマゾンの存在

アマゾンの配送は以前、佐川急便が請け負っていました。佐川が蹴ったので、ヤマトに乗り換えたわけですが、それによってヤマトは悲鳴をあげているという図式になっています。

(会員回答) 再配達の増加

ヤマトはなぜ再配達サービスを始めたのでしょうか、もう少し掘り下げて下さい。

(会員回答) お客が喜ぶから、サービスで始めたと思います。

色々な回答が出ました。これは、皆さんに出来るだけ色々な知識を増やしましょうとお話していることに繋がります。

私はこの記事を読んで、今の日本のものの考え方や経済の仕組みといったものが色々と浮き彫りになって来ていると思いました。

ヤマトは値上げせざるを得ない状況に陥った。そうすると人手不足というキーワードが一つ出てきます。人手不足は日本の国全体の問題です。では、日本の国としてどうすればよいか・・・。政治も経済も教育も全て、自分自身に置き換えて考えていかなければいけません。目先の解決策として出てくることは、宅配ロッカーを個人宅に置く、コンビニで受け取る、駅に受取りロッカーを設置する等。つまり、ドライバーの代わりに個人が取りに行くという動きに流れが変わって来たと言えます。もともとヤマトの時間割サービスの出だしは、小倉昌男社長が、在宅している時間に届けてほしいというお客様の立場に立っ

たサービスを社員の意見からヒントを得て始めたものです。それを他の業者も真似しました。日本の企業は良いと思うこと、利益に繋がることはすぐに真似をするから、一瞬にして日本全国に広がったわけです。日本人は右に走り始めれば皆が右に行く、左と思えば皆が左に走ってしまう国民性です。

そういう国民性を考えると、今、一番危ないと思っているのは危機管理です。北朝鮮からミサイルが飛んできたらどうするか、盛んに官邸で煽っています。地下に逃げるとか、色々言っていますが、日本の地下鉄の深度ではとても助かりません。危機管理の観点からすると、戦争が近づいたと感じます。そして日本民族は雪崩をうって戦争に動こうとする状況にきている、という危険性をヤマトの値上げのニュースから感じました。

もう一つの視点を申します。日経新聞が物流企業と個人向け通信販売を手がける荷主企業にアンケート調査を実施したところ、ヤマトの値上げによって7割の企業が値上げの計画をしているという結果でした。それに対して荷受け側も、値上げはやむを得ないと思っています。そこから考えられることは、日本は値上げが当たり前になってきたということです。物流企業に限らず、これから日本の国全体あちこちで値上げが始まる予兆だと思っています。そうすると、2020年以降日本の国がどうなるかというテーマに繋がって来ます。さて、オリンピック直後、景気はどうなるでしょうか・・・景気が良くなるか、悪くなるか、それぞれお考え下さい。

今、ヤマトの値上げというテーマについて、自分自身の引出しから知識をどんどん引っ張り出して横に並べています。そうするなかで、右の方にある知識と左の方の知識とが融合してくると、新しいものの考え方が生まれてきます。それに自分自身の判断を入れると見識に変わります。

一つのテーマをずっと掘り下げていくと、見識に繋がります。その思考方法は「遊」の段階に入っています。一冊の本を読んで楽しいと思えることは、そこからどんどん連想をしていって、自分自身の仮説が生まれる。その仮説を味わい楽しむ状況になって来るからです。

私が教わった石川梅次郎先生は講義をされる時、下を向いてブツブツ話をされるのであまり面白くないのですが、講義が終わって世間話が始まると実に面白くて、そちらの方がずっと楽しみでした。先生のお話を聞いていると知識がどんどん溢れてくるのです。やはり知識を沢山集めておいて、それをしっかり心の中で温めていると、発酵して突如として良い考え方が生まれてきます。そういうふうに古典を味わっておられる先生でした。

本との接し方

100年経営研究機構という団体から講演を依頼されました。100年続く経営を目指している方達が集まっているということで、先日、講演内容について打合せをしてきました。その際私が持参したのは、帝国データバンクの藤森徹さんが書かれた『あの会社はこうして潰れた』という本です。その中には、100年の業歴を持つ企業には3つの特徴があると書かれています。

1、事業承継が上手くできている

一人の社長が25年社長業を続けると、100年続くためには事業承継が4回必要です。その4回がきちんと出来なければ100年は続きません。

2、取引先と友好的な関係が結ばれている

取引先も潰れますから、お客さんをしっかり選んでいるかどうか。また、相手からも選ばれる信頼関係があるかどうか。お客様の棚卸しも含めて、良い取引先とずっと付き合っているかどうか重要です。お客様は大体わがままです。それに今の世の中は安い方が良いという考え方が刷り込まれ過ぎています。「安い＝良い」だけではない、高くても良いのです。高いからこそ良いと思えるような経済があってよいと私は思っています。

3、大番頭の存在

社長を盛り立てる良い大番頭がいるかどうか。社長が駄目なら、その社長を交代させてでも会社を存続させようとする人物。自分が社長になるのではなく、社長になるべき人物を探して盛り立てていくという大番頭の存在がある。

さて、ここからが肝心です。本を読んで、書いた人に会いたいと思うかどうか……。私の場合、著者がどんな気持ちで書いたのか、この部分はどんなことを考えて書いたのか、具合によっては著者のイメージが浮かんでくる。そういう読み方をしています。甚だしい人は、「真夜中にその著者と格闘する」という方もいます。安岡正篤先生は家に帰って書斎に飛び込むと、本（著者）が「お帰り」と言ってくれると言っておられました。

そういう観点からすれば、当然、著者が生きていたら会いたいと思いますね。会いたいと思ったら、伝手を頼って会いに行けばよいのです。私は今まで、何度かそうして来ました。残念ながら著者がすでに呆けていて会えなかったこともあります。今回は是非とも著者の藤森徹さんにお会いして詳しくお聞きしたいと思い、帝国データバンクに問合せました。そうしましたら藤森さんは少し前に亡くなっていました。

会えた人の話をしましょう。何度かご紹介した『最終目標は天皇の処刑—中国「日本解放工作」の恐るべき全貌』を書かれたペマ・ギャルポさんです。この本は、中国が日本を

侵略するためにどう動いているか、日本人はそれに気付くべきであるという思いからショッキングなタイトルになっていますが、中国の軍人たちの考え方を要約したものです。また、チベットが如何に中国に呑み込まれていったか、その経緯が書かれています。この本を読んで私は本当にそういうことが起きているのか、この人は本物かと思って、伝手を辿って会いました。そして、本物だと思いました。話を聞くことが出来て良かったと思っています。

ということで、著者が生きていればお会いする。亡くなっていたら、その方はどういう人だったか、どんな思いで書かれたのか等々、身近にいた人にお聞きするとよいでしょう。身近な人達も亡くなっていたなら、本をひたすら読み込んでみる。その本が本物であれば、真剣に読めば読むほど、どこかでカチンとぶつかります。偽物ならば、だんだん読む気がしなくなってくるものです。ですから積読で、読まない本が沢山あっても気にする必要はありません。自分を呼んでいると感じる本は、自然と眼に飛び込んで来ます。そしてカチンとぶつかります。私の経験で、本屋さんで何もためらわずにずっと手が出た本を買って読んでみると、やはり良い本だと感じます。

ということで、本の選び方・読み方、生きていていればどうやって会うか、亡くなっている方であればどうやって付き合っていくか・・・こういうものが本の中から見えて参ります。

知識・見識・胆識

今日ご紹介する本は、安岡正篤先生の書かれた『人物・学問』（明德出版社）です。本日のテーマ「知識・見識・胆識」の胆識について書いてある本で、特に河井継之助について書かれています。

では、知識はどうやって得るか、見識はどうやって得るか、胆識はどうやって自分のものにするか、というテーマでお話をしたいと思います。

知識を得るには、沢山のの人に会うこと、沢山の本を読むことです。次に、沢山のの人に会ったなら、その人が本物かどうかを見分ける力をつける。沢山の本を読んで、その本が本物かどうか見分ける力をつける。そのくり返しで知識は広がります。必ずどこかで自分が素晴らしいと思う人物・本にぶつかります。本であれば、比較的手に入れやすいのは古典でしょう。昔から今に伝わる、良いと思う古典を探し出すことです。私は論語をその一つに選んだわけです。

見識とは色々な引き出しを持ち、判断の三原則（本質・大局・歴史）で物事を見ていきながら、自分はこう考える、こうすべきだという判断基準を明確に出していく。その結果

人さまに、こうした方が良くとアドバイスが出来る。つまり、どうすべきだという判断が見識です。

見識まではだいたい皆さん辿り着きます。その次に胆識までたどり着くのが大変です。胆識はどうすれば身に付くか、その答えが今日紹介する安岡正篤先生の本に入っています。すなわち、胆識が一番簡単に身に付くのは戦場に出ること。生き死にを何度も味わう、場数を踏めば胆力は生まれる。生死の狭間に身を置くのがよいが、今の時代であれば、良いと思った本をとことん読みなさい。そうすれば必ずカチンとしたものにぶつかる…という意味のことが書かれています。

私はそれに付け加えて、素晴らしい本に出会うことをお勧めします。素晴らしい人物に出会うこと。その中から自分がこれだと思うことを一つでも吸収したなら、胆力を練る手がかりが出来る。それをどんどん練ってゆけばよいのです。

先日、青森県三沢市にある旧渋澤邸に行って来ました。平成3年に古牧温泉に移築され、現在は星野リゾートが運営する青森屋の敷地内にあります。渋澤邸は木内信胤先生が新婚時代に居候をしておられた屋敷で、木内信胤先生の匂いに触れたいと思って出掛けました。自分が私淑した方の所に行くのは良いことだと思います。

それから高橋是清邸にも行って来ました。小金井市にある江戸東京たてもの園に移築復元されています。2・26事件で襲撃して殺された場所も確認しました。やはり、実際に出かけてみると、それなりに迫って来るものがあります。

もう一度出かけようと思っているのは、河井継之助のお墓参りです。以前、河井継之助のお墓参りをした時に不思議な体験をしました。カメラで写真を撮ろうとすると、何か分かりませんが真っ赤な火柱が立ったのです。変だなと思いながら写したのですが、写真には火柱は映っていませんでした。帰りがけに長岡藩と官軍が戦った北越戦争の戦場跡に行きました。今はのどかな田園風景が広がっていましたが、そこでシャッターを切ろうとすると、やはり火柱が立ちました。レンズを他に向けると、普通なのです。こういうことも世の中にはあるのかなと思って、不思議な体験をしました。

胆識の場合は、人智を超えたものが宿るのではないかという気がして、今の話を申しました。

恒例の質問

では恒例の質問を致します。

○ 5月に入って、良い日が続いている実感をお持ちの方

何度も申しますが、良い日・悪い日は好き嫌いですから、どういう内容でもよいから今日は良かったなと思えば、それをずっと広がればよいのです。くれぐれも天秤にかけないで下さい。

- 5月に入って、嘘をつくことが少なかった方
- その中で、今月は一度も嘘をついていない方
- ・・・手が挙がりました。凄いですね。
- 今月に入って、有難うと言われることが多かった方
- その中で、心のこもった有難うを言われた方

最近私は、心のこもった「有難う」を言ってくれる方の名前を書いています。よく耳をすまして聞いていると、みな適当に言っています。表面的な「有難う」が多いのです。本当に心の底からの「有難う」はそう滅多にあるものではないと思いますが、言われたら嬉しいですね。人さまに何かをして戴いたり、して差し上げたりする中で、心のこもったやり取りが出来たら素晴らしい人間関係になります。「有難う」の言葉を言わなくても、表情や目だけで伝わって来る、そういう心のこもった触れ合いがあると良いなと思います。最近、「有難う」という言葉から、そういうものを連想します。

そうすると、その人が生きていくというだけでホッとするような、そういう人物が出てきます。私の場合、母親がそうでした。やはり、いてくれるだけでよい存在が必要だと思います。

- 今月、健康法をどんどん実践している方

私は自転車に毎日乗るという健康法を1年間続けましたので、今は出来る時に乗るように変えました。＜筋肉を強化する＞から、＜筋肉を維持する＞に変えました。そうすると義務感がなくなって、ホッとしています。1週間のうち2、3回になりましたが、筋肉の張りは保っています。

- 昨晚寝る時に、明日以降のことを過去形でイメージして眠れた方

山崎さんが早めに手を挙げました。どんなことをイメージしたか、差支えなければお話し下さい。

(山崎) 今朝の朝稽古で皆さんが楽しく稽古をしている姿をイメージしました。

有難うございます。ポイントは、皆が楽しんでやっているなという所で止めると、まだ過去形になりません。皆が楽しんでいるのを見て、＜ああ良かった！良い日だったなあ＞と過去形でイメージ出来ると、更に磨かれると思います。

- 今月は自分磨きを沢山していると思う方

やはり自分で自分を磨こうと思わないと、自分磨きにはなりません。何でも自分磨きに

なりますので、どうぞ実践して下さい。

論語の解説

論語の解説を致しましょう。本日は衛霊公篇 11～14 です。

【十一】 しいわ子曰く、ひととお人遠き おもんばかりな慮 かなら無ければ、ちか必ず うれいあ近き **憂有り。**

孔子が言われた。「人は、遠い先のことを熟慮して手を打たなければ、必ず近い将来に心配事が起きるものだ。」

安倍首相で考えれば、遠き慮とは、政権をオリンピックまでもたせたい。そのための土壌は出来たわけです。そうすると必ず近場で代償を払わなければいけないわけですが、安倍さんは代償を払わずに先への手を打っているから、そのうち政権がひっくり返るような事態が起きると思います。

皆さんもご自分の 5 年後、10 年後を時々考えるとよろしいでしょう。具体的な手法を申しますと、私は高校時代から日記をつけています。最近は、昨年の今日は何をしていたか、5 年前の今日は何をしていたか、10 年前の今日は・・・と見ます。そうすると基本的なものの考え方は変わらないけれども、明らかに変わっていることは体力の衰え、お付き合いしている人の移り変わり、それと取り組んでいる仕事の移り変わりです。5 年、10 年、20 年と遡っていくと見えますから、それをベースにして、3 年後、5 年後、10 年後が何となく想像出来ます。日記を書く習慣がない方は、1 年に 1 回でよいから自分の思いを書いておくと良いでしょう。それを 1 年に 1 回見直ししてみると、この「遠き慮り」に繋がります。

【十二】 しいわ子曰く、や己んぬるかな、われいま吾 とく未だ この徳を いろ好むこと この色を ごと好むが もの如くなる み者を見ず。

孔子が言われた。「もうおしまいだな。私は未だ女性を愛するほどに徳のある者を愛する人を見たことがない。」

「徳を好むこと」とは、自分の人格を磨きたいということです。中斎塾フォーラムでいけば、「学びたい」と考えればよろしいでしょう。10 周年記念式典に参加したシムックスと郵便递送の若い社員に感想を聞いたところ、「学びたいと思う人がこれ程いるのかと驚いた」「学ぼうという人の目は意欲的で輝いていた」といった声が沢山聞かれました。先日、季刊誌のインタビューで清水市長にお話を伺った際、これから何をしたいかお尋ねしたら、

学びたいと言っておられました。大学にまた行きたいと思っておられるそうです。

「色を好むが如く」という部分で申しますと、京都大学の大島先生の、若さを保つ秘訣の「か・き・く・け・こ」については以前からお話しています。大島先生は「こ」は恋人と書いておられますが、私は恋心と変えてお伝えしています。その後、大島先生の書かれた別の本を読んだら、御本人は実践しておられました。奥様と別れて、新たな女性と結婚されていました。それについてコメントは差し控えますが、いずれにしてもフロイトの心理学でいえば、色を好むことはエネルギー・原動力になりますから、完全否定は出来ないと考えています。

【十三】しいわ子曰く、ぞうぶんちゆう臧文仲はそ其れくらい位をぬす竊む者か。りゆうかけい柳下恵のけん賢なるをし知りて、とも与にた立たず。

臧文仲は魯国の大夫です。

孔子が言われた。「臧文仲は職責を果たさない、位を竊む者ではないか。柳下恵が賢いことと知っていながら、推薦して共に朝廷に仕えようとしなかった。」

会社で考えれば、能力のある部下がいたら引き立てて自分と同列にしたいと思う、そういう社員がいるかどうか。役員であれば、部長・課長の中で素晴らしい社員がいたら、同じ役員に推薦する人物がいるかどうか。

政治家の場合であれば、官僚を見ていて、その人物が位を竊む者かどうかを意識して判断するとよいでしょう。

【十四】しいわ子曰く、み躬みずか自らあつ厚くして、うす薄くひと人をせ責むれば、すなわ則ちうらみ怨にとお遠ざかる。

孔子が言われた。「自分を厳しくして、他人にはきつく責めない。そうすれば厄介事には巻き込まれない。」

自分に厳しく他人には寛容ということですが、なかなか難しいですね。自分自身に厳しくということは、相手に対しても厳しく言っている場合が多いものです。ですから本人がはっと気づいて欲しいという願いを込めながら、自分自身を厳しく責めるのだと捉えて下さい。

世の中、人には厳しく言うけれども自分に甘い、そういう人が何と多いことか。私も過去を振り返ってみると、自分に甘く、人には厳しかったなあと反省します。さすがに最近では厳しく言わなくなりましたが……。皆さんは如何でしょうか？

政治の要諦

今のマスコミは非常に良くないと思っています。事実を事実通り伝えない、歪めて伝えています。阪神淡路大震災の時、テレビ画面には潰れた家や瓦礫だらけの映像ばかりが映されて、大変な地震だと思いました。ところが現地に行ってみたら、潰れた家の両脇にはきちんと建物が立っていました。テレビが伝えるべきは全体を俯瞰した様子であるにもかかわらず、私的に潰れている酷い映像を切り取って映しています。そういう伝え方がメディアは多すぎます。

森友学園に関する問題も、今、安倍さんは叩かれる側に回っていますから、とにかく安倍さんを落とす事だけが正義であるという思惑でメディアは動いていると感じます。一時、魔女裁判のような話が出ましたが、あれは逆の意味のやらせです。客観的な事実をねじ曲げて誘導しようとしているように見えます。

新しく出てきた加計学園にしても、報道の仕方に問題がありますね。判断する材料を出すのではなく、こういう酷いものがあるぞという意識を擦り込ませようとしている。そう見えて仕方ありません。

こういう状況で安倍政権が続いていること自体、おかしい現象だと思っていますので、何かのきっかけで転げ落ちるのは当たり前だと感じます。ただ日本の政府は事実を事実通り伝えない仕組みになっているので、どこかに風穴が空かなければいけません。

政治家の要諦を考えれば、政治家で良くないのは保身です。自分を守り過ぎています。論語に「民は由らしむべし、知らしむべからず」という文章があります。

あの人の言動は信用できる。あの人が言うのであれば黙ってついてゆこうじゃないかと思う……。それが「由らしむべし」です。

政治家が、本当にこれは皆のためになると考えて行動しているから真意を伝えたい、そう思って努力をするけれども伝わらない。知らしむことがどうしても出来ない、何と哀しいことか……。それが「知らしむべからず」です。

これが政治の要諦になると思います。ということは、自分自身の保身はやめなければならない。ところが今テレビに登場してくる人たちは皆、保身ばかりです。何をやるにしても判断基準は「わが身」が先に立っています。アメリカのトランプファースト（明らかに

アメリカファーストではなく、トランプファーストです) しかり、都民ファーストならぬ小池ファーストしかりです。自分の我を捨てたところから政治はスタートすると思います。自分自身に保身の気持ちがあるかどうか、いま一度、政治家は見直し自戒すべきです。

ちなみに自戒ということで申しますと、我々は、佐藤一斎の「三学戒」が良いと思います。「少にして学べば則ち壮にして為すことあり。壮にして学べば則ち老いて衰えず。老いて学べば則ち死して朽ちず。」自分自身を向上させるための三つの戒めです。

以上で本日の講話を終了致します。有難うございました。